

実態に見合った賃上げを

ます。給与は労働の実態に見合った額ではないと強調します。「(適切な)お金をもらえればもう少しがんばれた」と職場を去る人にやるせなさを感ずります。

東京都内の入院病棟で新型コロナウイルス感染症患者を看護する大島野江子さん(43)。重症者の急増で医療が逼迫した8月の「第5波」当時を、「みんな限界のなか200%でやっていた。精神的に極限でした」と振り返ります。

ケア労働の現場から

振り返ります。

憤り感じた

夏の第5波

東京五輪・パラリンピック開催中の8月初旬、都の新規感染者は5000人を超えました。大島さんが働く王子生協病院(北区)では、12床あるコロナ病棟がほぼ満床になりました。重症化する速度が上がり、患者の酸素濃度のモニターを見ながら常にヒヤヒヤしていたといいます。

青。認知症があったり寝たきりの高齢者が入院すると、介護も必要になります。防護服を着ての対応はサウナのように、想像以上に大変だったと振り返ります。周りからのささいな指摘にも「こんなに頑張っているのに」と、ストレスになったといます。

速度が上がり、患者の酸素濃度のモニターを見ながら常にヒヤヒヤしていたといいます。

医療現場で働く人は行動制限が求められる一方、自公政権は「GO TO トラベル」や東京オリパラを実施。「政府

日に日に増える入院患

オリパラを実施。「政府

全ての医療従事者を対象に 看護師



新型コロナウイルス感染症患者を看護する大島野江子さん

は感染を増やすようなことをして、国民の命を何とも思っていないんだなと腹立たしかった」と話します。

厚田政権はコロナ対応をする看護師に限り給与を月額4000円上げるとしています。

都の特殊勤務手当(危険手当)も、コロナ対応

分一般病床の人手が減ります。一般病床でナースコールが鳴り響くのを、心の中で「取れなくてごめんね」と申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

「第5波」では、入院できず自宅療養を強いられた人が多くいました。

「往診や訪問看護で踏ん張りながら、在宅患者の命をつないでくれていた」と涙を浮かべます。

訪問診療を担う診療所には危険手当が出ないことに、憤りを感じます。

引き上げの抜本的実施

コロナ以前から慢性的な人手不足の医療現場にコロナが追い打ちをかけた。仕事が膨大なうえ、夜勤もあり精神的・肉体的負担は大きく、新人が定着しづらいとい

(小林圭子)